

問題の所在

近年、SNS 上などで、『創価学会教学要綱』と創価大学名誉教授・宮田幸一氏の論文との類似性が指摘されている。筆者も以前より両者の近似性を感じていた一人である。創価学会元副教学部長・須田氏は、原田会長宛の書簡の中で「『教学要綱』を作成した中心は創価大学名誉教授の宮田・菅野両氏であると聞いております」と述べている（参考 [file_20240930-185744.pdf](https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B)）

一方、創価学会男子部教室は聖教新聞ウェブサイト上で「これは事実と異なるものであり、宮田・菅野両氏は刊行委員会には入っていない」として、両氏の関与を完全に否定している。

（参考 <https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B>）

そこで筆者は、『創価学会教学要綱』と宮田論文を熟読することと並行して、自然言語処理 AI（ChatGPT）の解析機能を用い、教学要綱と宮田論文を客観的に比較検討した。その結果、その一致の度合いは、筆者自身の予想をはるかに超えるものであり、看過できないレベルに達していた。

なお、本稿の目的は特定個人を批判することではなく、教学資料の正確性と学術的透明性を確保することにある。創価学会教学の信頼性を維持するためにも、文献的根拠の明示と思想的整合性の確保が今後一層求められるであろう。

問題その一

宮田論文（優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018, p. 38-39）

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf>

「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」という文は、

「まことの一念三千」の法門は寿量品の文、すなわち久遠実成を表わす文の底に沈めて
いるという意味だと全体の文脈から解釈できる」

(教学要綱 p. 70)

「大聖人は「開目抄」に「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」と述べ、「久遠実成が説かれた如来寿量品第十六の文の底に、「法華經」の肝心である一念三千の法門が示されていると洞察された」

引用終わり

個人的な意見

教学要綱には宮田論文への言及が一切ないが、宮田教授独自の解釈、すなわち、「久遠実成を表す文に、一念三千が沈められている」という読解が両方で共通している。しかもこの独自の解釈が、教学要綱ではあたかも日蓮自身の洞察であるかのように置き換えており、「権威の不正な移転」の可能性を否定できない。この点において、研究的誠実性に重大な問題がある可能性が高い。

問題その二

「問題一」と関連する問題である。宮田教授は、開目抄の「本門寿量品の底に沈められた一念三千の法門」を「まことの一念三千」と同格であると解釈し、「久遠実成を表わす文の底に沈めている」という結論を出している。この解釈のプロセスが次のように述べられている。

(優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018, p. 38-39)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf>

「但し此の經（法華經）に二箇の大事あり俱舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもしらず華嚴宗と真言宗との二宗は偷に盗んで自宗の骨目とせり、一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知つてしかも・いまだ・ひろいださず但我が天台智者のみこれをいだけり。一念三千は十界互具よりことはじまれり」

この文章全体の中で、回答の手がかりを見つけようとすると、当然「二箇の大事」が重要になる。その「二箇の大事」については、『開目抄』ではこのように述べている。

華嚴・乃至般若・大日經等は二乗作仏を隠すのみならず久遠実成を説きかくさせ給へり、此等の経經に二つの失あり、一には行布を存するが故に仍お未だ権を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を発せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・一切經の心髓なり、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顯本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず。

「二乗作仏」＝「迹門の一念三千」、「久遠実成」＝「まことの一念三千」と明快に述べている。したがって「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」という文は、「まことの一念三千」の法門は寿量品の文、すなわち久遠実成を表わす文の底に沈めているという意味だと全体の文脈から解釈できる」

引用終わり

そして（教学要綱，p. 110-112）にも、「（五）まことの一念三千」というタイトルで、ほぼ同一の記述がみられる。下に引用する。

「（五）まことの一念三千

「開目抄」には、「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顯本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにいたり」と述べ、久遠実身が説かれた本門に至らなければ、一念三千が完全には説かれたことにはならないと指摘されている。

如来寿量品第十六で、久遠実身が示されたことで、釈尊に久遠以来、仏界が具わっていることが明かされた。そして、「我は本菩薩の道を行じて」と説かれるように、その久遠の仏身にも菩薩界を代表とする九界が具わることが示された。ここに、無始無終にわたる十界互具が明示されたのである。そのことを「開目抄」には、「本門にいたりて（中略）本門の十界の因果をとき顯す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし」と述べられている。

大聖人は、天台大師が「摩訶止観」で説示した一念三千の観法と、一念三千の観法によって覚智し体得した究極の法を、どちらも一念三千と呼んだが、その意義を明確に立て分

けられた。そして、後者を「まことの一念三千」「真の十界互具・百界千如・一念三千」と位置づけ、それは「法華經」本門に示されているとされたのである。

引用終わり

個人的な意見

両者とも「まことの一念三千」を完全無欠の一念三千、日蓮仏法の一念三千（すなわち文の底に沈められた一念三千もこれに相当する）としており、明らかに誤った解釈である。

天台大師は本門寿量品における久遠実成を説いていないわけではなく、したがって「天台大師が『摩訶止観』で説示した一念三千の観法」こそ「まことの一念三千」に相当する。

また「文の底に沈められた一念三千」とは、「まことの一念三千」の奥に沈められた一念三千、すなわち大聖人の南無妙法蓮華經そのものを指すとするのが創価学会及び日興門流の解釈である。よって、宮田教授および教学要綱に見られる一連の理解は、日蓮教学と天台教学の体系を大きく誤解した独自説であり、このような議論は他に類例を見ない可能性が高い。なお次の論文(2005-2009)は、優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題（2017-2018, p. 37-38）、とほぼ同様の内容で、なぜこの教授がこのような独自解釈に至ったかが説明されているので、良い参考資料となるだろう。

日有の教学思想の諸問題(2)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-2.html>

問題その三

これは、「問題一」、「問題二」と関連する問題点である。

宗教学会発言への Q&A

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

「創価仏法哲学と思想を布教」とありますが、創価学会は日蓮大聖人の信賴の置ける御書、並びに大聖人滅後に大聖人に仮託して作成された日蓮仏法の御書とされるものから信

仰上重要であると思われるものを取捨選択して、それらを基礎にして「創価仏法哲学と思想」を構築していこうとしています。その作業はまだ始まったばかりですが、その作業の中で、従来見落とされてきた御書のいくつかの解釈問題も明らかにされつつあります。例えば『開目抄』の有名な「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」という一文の「寿量品の文」とはどの文なのかという問題に関して、従来は日寛上人の解釈に従って、本因妙の文、すなわち「我本行菩薩道」とであると解釈してきましたが、この文は『開目抄』では引用されていません。もし大聖人が『開目抄』の中で、その答を用意していれば、少なくとも日寛上人の解釈は誤っています。ここで『開目抄』の中に答があるのかということを探すミステリーのパズルゲームが始まります。その答は皆さんが自分で発見してください。ヒントは日蓮正宗では本因、本果、本国土の三妙合論が説かれることにより、「真の一念三千」が明らかになると考えていますが、『開目抄』からそれに該当する寿量品の文を探すということです。創価学会は従来のさまざまな教学的しがらみから脱して、もう一度御書を丁寧に読解することから、日蓮教学の可能性を開拓したいと考えているようです。」

引用終わり

個人的な意見

宮田教授のこの論文において、従来の創価学会における伝統的な解釈を否定し、自身の解釈に基づく教義理解を提示している点は、学術的に重大な意味を持つ。しかし、その際に「創価学会は…考えている」と曖昧に記述されており、いつ・どこで・誰によってそのようなことが行われているのが明示されておらず、責任の所在が不明確である。そして、池田名誉会長の教えとはまるで違うこの教授独自の解釈が教学要綱に反映されているという事実があり、創価学会首脳部と宮田教授の関係について、読者の間でさまざまな推測が生じる原因となっている可能性がある。

「まことの一念三千」の法門は寿量品の文、すなわち久遠実成を表わす文の底に沈めているという宮田教授の推測は独自教義か：身延教学との比較

堀内紳行（2015）『日蓮聖人における如来寿量品観』日蓮教学研究所紀要、p. 124-125

立正大学学術機関リポジトリ <https://rrepo.rissho.ac.jp>

には次のようにある。

「(4) 本迹相对

実大乘である『法華經』の迹門と本門を相对を 確認することによって、聖人が本門重視の立場が明か される。聖人は「本門寿量品の文の底」とて、一念三 千法門が本門寿量品の教相から明かされて、ここに真の一念三千の法門が示される。(中略)

(5) 教観相对

本門寿量品こそ最重要であることをを教示されているのである 。それによって、「一念三千の法門は但法華經の本門寿 量品の文の底にしづめたり」の文が見逃せず『法華經』の教相（教）と寿量品の文底（観）との相对が明らか となる。すなわち、聖人は一代聖教のうち『法華經』こそ最勝であり、さらに、本門寿量品にこそ本仏釈尊 の真実の教えがおさめられていると教示されている。」

引用終わり

個人的な意見

天台のものは教相としての「まことの一念三千」であり、日蓮のものは文底に示された観法としての「一念三千」であり、両者を単純に同一視できないというのが身延派の教えのようであり、創価学会（教学要綱は除く）の考え方に近い。一方で教学要綱は本迹相对を表す「まことの一念三千」を大聖人の文底の一念三千と混同しており、この本は p. 70 で種脱相对を説いているので、ここで自己矛盾を起こして崩壊しているのである。この点でこの教義は、身延教学の体系にも及ばないほど独自性の強いものであり、むしろ天台教学の影響を色濃く残すものである。

総括

『開目抄』に示される「文の底に沈められた一念三千」は、御本尊と不可分の根本法門であり、創価学会教学体系の中核とみてよいだろう。池田先生は『法華經の智慧 第4巻』（p. 74）において、「人法一箇の御本尊です。“人”の側面は久遠元初の自受用身如来、“法”の側面は事の一念三千です」と述べ、さらに「その成仏の本源を示唆するのが、今の『我本行菩薩道』の文だね」（同書 pp. 37-38）と述べており、一念三千が寿量品の『我

本行菩薩道』の文底に沈むことをここで指し示している。従って、この法門の理解は創価学会教学において極めて重要な意義をもつ。

しかし、『教学要綱』(p. 70)における関連箇所表現には、従来の創価学会の教学理解と異なる解釈が見られる。とりわけ、「(大聖人は) 久遠実成が説かれた如来寿量品第十六の文の底に、『法華経』の肝心である一念三千の法門が示されていると洞察された」との一節は、先行する宮田教授の論文、優陀那日輝「本尊略弁の構成と諸問題」(2017-2018, p. 38-39)の記述と、表現および内容の両面において類似性が著しい。それにもかかわらず、当該文には文献提示がなく、出典の明示がなされていない。この点は、学術的な引用慣行の観点から問題となろう。

また、『教学要綱』では主語が「大聖人」、述語が「洞察された」とされており、これにより一研究者の個人的な見解が、あたかも日蓮大聖人自身の教学的洞察であるかのように読める構成となっている。この点は、「文体操作による権威転写」として、学問的慎重さを欠く可能性がある。さらに、『教学要綱』が池田先生の監修名義で刊行されているため、編集上の記述責任と監修上の名義責任の範囲が曖昧になっている点も今後の出版倫理の観点から問題となりうる可能性がある。

問題その四

次の箇所が、宮田論文と教学要綱との間で、理論構造、文体、そして独自性でほぼ一致している。

(優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018, p. 7)

hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf

「もしこの(所謂)の用法を『報恩抄』に適用すれば、前文の「本門の教主釈尊を本尊とすべし」という表現の意味を、後文の「宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし」という表現で説明したというように解釈できる。つまり「本門の教主釈尊を本尊とすべし」ということは一尊四士という表現様式を意味しているのではなく、曼荼羅の上部部分(「宝塔」=題目宝塔=中尊、「内の釈迦多宝」=両尊、「外の諸

仏」＝分身、「並びに上行等の四菩薩」＝本化四士(磯野上掲書、本尊座配、pp. 225-231))
を意味しているという解釈も成り立つだろう」

引用終わり

(教学要綱, p. 80)

「本門の教主釈尊を本尊とすべし」の意味は、それに続く文で、「いわゆる宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏ならびに上行等の四菩薩、脇士となるべし」と具体的に説明されている。これは「観心本尊抄」に示された「本尊の為体」と同様の相貌である。よって

「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とは、「法華経」本門における釈迦が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅の御本尊を「本門の本尊」とすることであると解釈できる。文字曼荼羅の御本尊は、釈尊を久遠実成の仏ならしめた根本の法である「南無妙法蓮華経」を具現化した「本門の本尊」なのである。文字曼荼羅の御本尊は、釈尊を久遠実成の仏ならしめた根本の法である「南無妙法蓮華経」を具現化した「本門の本尊」なのである」

引用終わり

個人的な感想

宮田教授の独自見解で、「所謂」の用法を同格とし、『本尊釈尊＝脇士釈尊＝題目の本尊＋脇士釈迦＝全体で本尊』という解釈は、論理的に完全な自己矛盾を内包している。なぜなら、脇士である釈迦を含めた本尊の定義では、本門の教主釈尊そのものが本尊である理由を導けず、この理論は自己崩壊してしまうからである。さらに、教学要綱に見られる同様の記述は、宮田論文の議論と発想・結論の構造がほぼ一致しており、両者に類似性がみられる。この解釈を行った例は、私は宮田教授以外には確認することができない。従ってこの独自性の類似は、学術的な問題点となる可能性がある。

問題その五

また、次の文も「問題その三」で引用した教学要綱と同じ思想を持っている。以下にその問題の箇所を引用する。

漆畑正善論文「創価大学教授・宮田幸一の『日有の教学思想の諸問題』を破折せよ」を検討する(6) 2011 / 法華仏教研究第11号「再び御影本尊論を論ず」と改題し掲載
(2011.12.18 付加)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

「また漆畑は『報恩抄』の解釈においても、奇妙な議論をしている。「本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦・多宝、外の諸仏并に上行等の四菩薩脇士となるべし。」の「本門の教主釈尊」を曼荼羅の「南無妙法蓮華經日蓮」を指すと主張し、それは「久遠元初自受用身たる末法の日蓮大聖人」のことであると主張する。そして「所謂宝塔の内の釈迦・多宝」はその次の部分の「外の諸仏并に上行等の四菩薩」と同格であって、「脇士となるべし」の主語になると解釈している。そしてこの「宝塔の内の釈迦」は脱益の釈尊を指すと主張している。この『報恩抄』を曼荼羅との関係で議論するならば、当然『観心本尊抄』の議論も参照しなければ片手落ちになるだろう。『観心本尊抄』では同様のことを「其本尊為体本師娑婆上宝塔居空塔中妙法蓮華經左右釈迦牟尼仏多宝仏釈尊脇士上行等四菩薩文殊弥勒等四菩薩眷属居末座迹化他方大小諸菩薩万民処大地如見雲閣月卿」と述べており、ここでは「南無妙法蓮華經日蓮」ではなく「妙法蓮華經」が中央にあり、その左右に「釈迦牟尼仏多宝仏」がいて、「上行等四菩薩」が「釈尊の脇士」となると述べているように読解できるのだが、漆畑はこの読解に賛成してくれるのだろうか。もし『観心本尊抄』がこのように読解できるのであれば、『報恩抄』の文章も漆畑のように複雑な解釈をすることなく、『観心本尊抄』と同様に「本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏（が妙法蓮華經の左右にいて）、并に上行等の四菩薩（が釈尊の）脇士となるべし。」と読解して、「本門の教主釈尊」と「宝塔の内の釈迦」とを別の存在であると解釈する必要がなくなるだろう。」

引用終わり。

そして、ほぼ同じ内容の議論が次の論文にもあるので、それも引用しよう。

[望月歓厚『日蓮教学の研究』における本尊論の検討](#) 2020-2022

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/mochidukihonzonron.html>

望月は『報恩抄』の「本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし」の文の「本門の教主釈尊を本尊とすべし」の部分は仏本尊であり、その形態は一尊四士であると解釈し、「所謂」以下は同時に授与された曼荼羅の説明であり、決して所謂以下で教主釈尊の形態を述べているのではないと解釈していた。望月は「『所謂』の語は同一一体を云々するのではなく、類似、若しくは近似の事例を挙げて説明する語である。同一の観念、全同の事体ではない」（注43）と述べているが、日蓮の「所謂」の使用例は、『開目抄』の「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり」に明瞭のように、「その謂う所は」「その意味は」「すなわち」という意味であり、「同一の観念」である。したがって三大秘法の一つとして明示された「本尊」である「本門の教主釈尊」は、「所謂」以下で示される『観心本尊抄』本尊段の「本尊為体」の本尊と同一であることが『報恩抄』で述べられていると私は解釈している。

個人的な意見

「所謂」を「同一の観念」と解釈することで本尊釈迦と脇士釈迦を同一のものとみなし、「脇士も本尊となる」という思想は、創価学会や日興門流、伝統的日蓮教学、身延の教義書、その他の学術書において確認できず、宮田教授独自の御書解釈である可能性が高い。その独自解釈が明示的に参照されずに教学要綱に掲載されていることは、学術的に大きな問題である可能性がある。また、脇士はあくまで本尊の従属的存在であり、それが本尊と共に本尊となるという解釈は、創価学会の過去の教義書にも確認できないし日蓮仏教の伝統的文献にも確認できない可能性がある。さらに、もし脇士の脇士である日蓮までも本佛（日蓮本佛論）とするのであれば、梵天・帝釈・天台・伝教・天照大神・八幡大菩薩などの諸天善神も全て本佛ということになり、二重の意味で論理が崩壊するのである。

問題その六

宮田教授は御本尊に関して次のような議論を行っている。引用しよう。

「望月歓厚『日蓮教学の研究』における本尊論の検討

[望月歓厚『日蓮教学の研究』における本尊論の検討](#)

7 大崎ルールによる望月本尊論の検討

私ならば、望月とは異なって、『観心本尊抄』で曼荼羅と本門教主釈尊の二つの本尊を示し、『報恩抄』で、本門教主釈尊を本門本尊とするということが明示され、「所謂」以下の記述により曼荼羅が本門教主釈尊本尊を含むということであると教示し、『本尊問答抄』で曼荼羅の中心が仏ではなく、法であることを、次第に教示したという議論を展開することもできる。少なくとも私の議論のほうが、大崎ルールに基づいており、文献学的にはより信頼できるということは明白である。

「10 『観心本尊抄』『報恩抄』は仏本尊論の御書か

曼荼羅にも、本門教主釈尊も四大菩薩も含まれており、しかも釈尊は曼荼羅の中では最高位の「右尊」として表現されている。本門本尊が釈尊一仏や一尊四士であったとしても、それは曼荼羅の中に含まれるのである。」

引用終わり

一方で、教学要綱の御本尊の説明は以下のような構造になっている。なお、序文、観心本尊抄の解釈、報恩抄の解釈、本尊問答抄の解釈、総括、という項目は、教学要綱の議論の構造の明確化の目的で私が独自に付け加えたものである。

序文 （創価学会教学要綱，p. 77）

「文字曼荼羅の御本尊を本門の本尊とすることに関して、「観心本尊抄」にある「寿量の仏」「此の仏像」という表現について、また「報恩抄」の「教主釈尊を本尊とすべし」の文について説明しておきたい。これらの文を根拠に、彫像などの仏像本尊が主張されることがあるからである」

観心本尊抄の解釈 (同書, p. 78-79)

「大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は「法華經」本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが主題の「南無妙法蓮華經」の脇士に位置づけられている。これは「南無妙法蓮華經」こそがすべての仏を生み出した能生として、根本の本尊たるべきことを示している。したがって、先の文の趣旨は、「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「寿量の仏」が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。」

報恩抄の解釈 (同書, p. 80)

「「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とは、「法華經」本門における釈迦が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅の御本尊を「本門の本尊」とすることであると解釈できる。文字曼荼羅の御本尊は、釈尊を久遠実成の仏ならしめた根本の法である「南無妙法蓮華經」を具現化した「本門の本尊」なのである」

本尊問答抄の解釈 (同書, p. 80-81)

「法華經」の題目を本尊とする理由として、「法華經は釈尊の父母・諸仏の眼目なり釈迦・大日総じて十方の諸仏は法華經より出生し給へり故に今能生を以て本尊とするなり」と述べられている。釈尊をはじめとして、あらゆる仏は「法華經」によって仏となったのであるから、「所生」である釈尊などの仏を本尊とするのではなく、「能生」である「法華經」の題目、すなわち「南無妙法蓮華經」を本尊とすることを明確に示されているのである。

総括 (同書, p. 82)

「日興上人は、本門の教主釈尊であることを示す四菩薩を脇士とする、いわゆる「一尊四士」像の造立は辛うじて容認されたものの、大聖人の真意は文字曼荼羅の御本尊にあり、それを本尊として受持すべきであるとされた」

また、追加として宮田教授はつぎのような発言もしている。

(優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018, p. 90)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf>

『本尊問答抄』と『報恩抄』『観心本尊抄』とを対立的に見ないという日輝の態度は評価できるが、『報恩抄』『観心本尊抄』が「人本尊」を教示していると一面的に解釈すれば、あとは『本尊問答抄』を人本尊の観点から解釈し直すという作業しか残らない。しかし、『報恩抄』『観心本尊抄』が「人本尊」と「法本尊」の両論併記であることを確認し、『本尊問答抄』が『報恩抄』を踏まえて著述されたという制作事情を考慮に入れば、『本尊問答抄』を基本にして『報恩抄』『観心本尊抄』を解釈するという作業の可能性も開けると思われる。」

個人的な意見

宮田論文では

- ①『観心本尊抄』＝曼荼羅と本門教主釈尊の二つの本尊を示す、
- ②『報恩抄』＝本門教主釈尊を本門本尊とする&曼荼羅が本門教主釈尊本尊を含む
- ③『本尊問答抄』＝曼荼羅の中心が仏ではなく、法

という宮田教授独自の理論展開の方向性が述べているが、教学要綱でもこの通りの順番の理論展開となっている。

- ①『観心本尊抄』＝本門寿量品の釈尊（寿量の仏）の本尊とそれを脇士とする題目の本尊
- ②『報恩抄』＝ 本門寿量品の釈尊・多宝、四菩薩が題目の脇士となる本尊＝「南無妙法蓮華經」を具現化した「本門の本尊」
- ③『本尊問答抄』＝「所生」である釈尊などの仏を本尊とするのではなく、「能生」である「法華經」の題目、すなわち「南無妙法蓮華經」を本尊とする

そして総括として、彫像などの仏像本尊ではなく文字曼荼羅を本尊とするとしているが、「(日興上人は)「一尊四士」像の造立は辛うじて容認された」という一文を入れており、インドやタイなどの仏教国の布教活動では、場合によっては一尊四士のような仏像は許容されるという意味に解釈できるようにとれるのは問題ではないかと思われる。

総括

次の教学要綱における報恩抄の解釈は、本尊＝脇士という自己矛盾を含み、論理的に崩壊していることは教学上の問題となる。また、この解釈は宮田教授の独自解釈と思われ、その文献の提示がないことは、学術的な問題となりうる可能性がある。

「本門の教主釈尊を本尊とすべし」の意味は、それに続く文で、「いわゆる宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏ならびに上行等の四菩薩、脇士となるべし」と具体的に説明されている。これは「観心本尊抄」に示された「本尊の為体」と同様の相貌である。」（教学要綱，p. 80）

「釈迦の仏像ではなく「南無妙法蓮華経」を本尊とすることを明確に示されている」（教学要綱，p. 81）

そして宮田教授は、この解釈が深刻な矛盾を含むことを認識していた。その議論を引用する。

『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html>

「3-5 まとめ

『報恩抄』には「一には日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝外の諸仏並に上行等の四菩薩脇士となるべし」とあり、前半の文により「本門の教主」＝久遠実成釈尊が本尊となることは明らかであるが、後半の文の読解意が難しい。「脇士」となるのは直前の「四菩薩」だけなのか、それとも「並びに」があるから「外の諸仏」も「四菩薩」と同格になり「脇士」になるのか、また「宝塔の内の釈迦多宝」には述語がないから、これも「脇士」の主語になるのか、この文だけを素直に読解するなら述語は一つしかないから、「所謂宝塔の内の釈迦多宝外の諸仏並に上行等の四菩薩」全体が主語となり、「所謂宝塔の内の釈迦多宝外の諸仏並に上行等の四菩薩」が「脇士となるべし」と読むしかないだろう。しかし前文で「本門教主釈尊」が本尊となることが明示されているのにもかかわらず、後文の「釈迦」が同じ対象を指示しているなら、それが「脇士」となることは論理的に矛盾している。前文の「本門教主釈尊」と後文の「釈

迦」とは異なった対象を指示しているとするのが日蓮正宗の解釈である。これに対して後文は不完全な文であり、多くの語句が省略されているという解釈もあり、似たような文章である『観心本尊抄』の「妙法蓮華經の五字の本尊」について述べた文章から省略部分を補うと「所謂宝塔の内の釈迦多宝（は妙法蓮華經の左右にあり、）外の諸仏（は大地の上に処し給い、）並に上行等の四菩薩（は塔中の末座に居して、）（釈尊の）脇士となるべし」となり、論理的矛盾は解消するが、この解釈によれば『報恩抄』では前文で「本門教主釈尊」を、後文で「妙法蓮華經の五字の本尊」を、本尊として認めているということになる。だがここでも二種類の本尊の関係は説明されていない。」

引用終わり

個人的な感想

題目と釈迦の勝劣は本尊問答抄で明らかであるが、それではその釈迦も本尊とするということは、この本尊とすべき釈迦とは、法よりも劣る釈迦とは別の仏と解釈する以外に矛盾を避ける道はない。そしてその仏こそが、「此の中には已に如来の全身有す」、即ち南無妙法蓮華經の中におわす如来であり、この如来を本尊とせよというのが、報恩抄の趣旨と解釈できる。以下に矛盾を起こさない日蓮本佛論を示そう。

日蓮本佛論

宮田論文や教学要綱にみられる矛盾を解決する唯一の方法は、先ほど述べたように、本尊となる釈尊と本尊となる題目を同一の存在とみなすこと以外にない。即ち、「南無妙法蓮華經即本門の教主釈尊」という人法一箇である。

日興上人の「日蓮聖人御出世の本懷南無妙法蓮華經の教主（釈尊）久遠実成の如来の画像」（原殿御返事）とは、そうした意味であろう。そして、脇士となる釈尊を、本尊となる釈尊とは別の仏とみなし、本尊問答抄等で説かれる法勝人劣の教えを、法＝題目、仏＝脇士となる釈尊とみなせば、法勝人劣と人法一箇の教義は矛盾しない。観心本尊抄の御文「本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊」とも矛盾しない（余談だが、『本門の教主釈尊の脇士となりて』と読ませる釈迦本佛論派の読む方は、法勝人劣の関係より邪義、或いは偽書の類である）。

それでは、脇士の釈尊ではなく、本門の釈尊とは如何なる仏なのかというと、その答えが実は観心本尊抄の次の御文にある。「其の本尊の為体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華經の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩」。本師とは教主釈尊のことであり、娑婆とは法華經が説かれる靈鷲山である。その上（真上とは記述されていないので、真上である必要はない）に本尊である南無妙法蓮華經が浮かび、その脇士として釈迦・多宝の二仏が並ぶという、御本尊の相貌となる。それでは御本尊には南無妙法蓮華經 教主釈尊と図顕されているかと思いきや、宝塔の下には日蓮の二文字がある。そしてこの本師こそが、「寿量の仏」であり、「本門の教主釈尊」と解釈できよう。

日興上人の直弟子三位日順は次のような言葉を残している。

「此の日本国は久成の上行菩薩の顕れ玉ふべきなり、然るに天竺の仏は迹仏なり、今日本国に顕れ玉うべき釈迦は本仏なり、彼の本仏の顕し玉ふ所なれば日本を中国と云ふなり」（日順雑集『富士宗学要集』第2巻）。

即ち、報恩抄の「本門の教主釈尊」或いは、日興上人のいう「日蓮聖人御出世の本懷南無妙法蓮華經の教主（釈尊）久遠実成の如来の画像」とは、「日本国に顕れ玉うべき釈迦」ということがいえよう。

それでは宝塔の下の娑婆世界の日蓮と、釈迦の脇士の上行との関連は何か。「日蓮が道をたすけんと上行菩薩・貴辺（四条金吾）の御身に入りかはらせ給へるか」（四条金吾殿御返事）のこの御文がその答えとなろう。四条金吾の身に入った上行菩薩とは、宇宙生命の菩薩界の働きを擬人化したものであり、実際に大聖人の魂が四条金吾に入ったわけではない。即ち、脇士の釈迦・上行とは、大聖人の己心の働きを顕す存在である。

それでは法勝人劣の問題はどうなるのであろうか。上野殿御返事には、土の餅を釈尊に供養した童子が阿育大王となった故事を述べて、法華經（法）に供養する功德はそれ以上と説き、法勝人劣を次のように説いている。

「土の餅を仏に供養し給いて一百年の内に大王と生れたり、仏はいみじしといへども法華經にたいしまいらせ候へば・螢火と日月との勝劣・天と地との高下なり、仏を供養して・かかる功德あり・いわうや法華經をや」

これと比較すべき御書が高橋殿御返事である。

「いさごのもちゐを仏に供養しまいらせしわらは百年と申せしに一閻浮提の四分が一の王となる所謂阿育大王これなり、法華經の法師品には而於一劫中と申して一劫が間・釈迦仏を種種に供養せる人の功德と・末代の法華經の行者を須臾も供養せる功德と・たくらべ候に其福復彼に過ぐと申して法華經の行者を供養する功德すぐれたり、これを妙樂大師釈して云く「供養すること有らん者は福十号に過ぐ」と云云、されば仏を供養する功德よりも・すぐれて候なれば仏にならせ給はん事疑いなし」

同じ故事が述べられ、今度は功德の多さが日蓮勝釈迦劣となっている。そして、日蓮を供養することで仏となると述べられている箇所は重要で、釈迦はもはや不要な存在であることが仄めかされていると考えられる。従って題目と大聖人との間には法勝人劣は存在しないといえる。

それでは人法一箇はどうなるのか。開目抄には「此の經一部八卷・二十八品・六万九千三百八十四字・一一に皆妙の一字を備えて三十二相・八十種好の仏陀なり」と説かれ、それ故に木絵二像開眼之事では仏像に開眼供養して、釈尊の生命である法華經を印する必要性を説く。一見するとこれは法勝人劣と矛盾するように見えるがそうではない。上野殿御返事には「今末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし、但南無妙法蓮華經なるべし（略）日出でぬれば・とぼしびせんなし」と説かれており、題目は太陽に、法華經はとしびに喩えられている。従って「題目勝法華經劣」が説かれており、法（題目）勝・人（釈尊）劣と矛盾するものではない。

題目と日蓮の関係はどうなるのであろうか。四信五品抄には「問う何が故ぞ題目に万法を含むや」と説かれ、題目には宇宙全体が含まれていることが示される。即ち、御本尊は即宇宙全体と捉えることができよう。三位日順は（本門心底抄『富士宗学要集』第2巻）で、「中央に安し奉る經題は円融の空諦なり所謂森羅の万法を以つて妙法五字に摂す、敢て闕滅せずと雖も而も其の体を亡泯する故に・是れ仮に円融の空体を証するなり、総体所顯の十界を互具の仮体と号するなり」と説いた。即ち、御本尊は宇宙全体の縮図という意味であろう。これは池田名誉会長の教えと全く合致するものである。御本尊が宇宙全体を表すのであれば、そこに我々、そして日蓮大聖人の御生命がないはずはない。三位日順は（誓文『富士宗学要集』第2巻）で御本尊を次のようにいう「別して本尊総体の日蓮聖人」、即ち御本尊即総じて大宇宙（我々一切衆生を含む）であり、別して日蓮大聖人ということになり、観心本尊抄の「此の仏像」とは、日蓮の仏像、という意味ということにな

る。これで創価学会の伝統的な日蓮本佛論が、宮田教授の言う「信頼できる文献のみ」から矛盾なく説けたことになる。

伝統的な創価学会の解釈を一言で説明するならこのようになる。「釈尊が迹仏であることは、言うまでもない。だが、それは久遠元初の自受用身（大聖人）を本佛とするがゆえ」（人間革命 6 巻ワイド文庫 2014, 推移の章, p. 183）

ところが宮田教授は論文「『本尊問答抄』について」において、この解釈を日蓮正宗の解釈と置き換え

（参考 <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html>）

「3－3－3 『報恩抄』

文献学的には架空の存在である「久遠元初の本因仏」を導入する学問的には根拠のない解釈となるだろう」として、この解釈を否定しているのである。

更に、宮田教授は論文「『本尊問答抄』について」、5－4－6 暫定的な結論

（参考 <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-5.html>）

で、創価学会を日蓮正宗に置き換えて次のように主張する。

「日蓮正宗が『御義口伝』などを使用して人法一箇説を主張することは無効であり、日興の本尊論とは違うことなどを示した」。これは、創価学会の戸田・池田先生が御義口伝を重要視された精神とは真逆のものである。しかもこの御義口伝を無視した独自解釈は、宮田教授自身が指摘しているように、本尊＝脇士という矛盾を含んで潰れているのである。仮にこうした潰れた学説が創価学会の教学に影響を与えていたならば、これは深刻な問題といえよう。なお宮田教授は、こうした矛盾に関してこのように述べている。

『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-3.html>

「4－2－8 「一体表裏観が基本思想」

日蓮はその著作においてさまざまなことを述べているが、そこに何か整合的な、首尾一貫した論理があるに違いないと想定することは、信仰者としては当然の態度であるかもしれないが、人間の考えることは絶えず揺れ動き、十分に考え抜いて発言することは稀だし、当人は整合的であると考えていても、よく検討すると矛盾があるという事例を見出すこと

は数多いし、他者に指摘されて初めて自分の誤解に気づくということも私の経験上数多くあったのだから、日蓮だって必ずしも整合的な思想展開をしているわけではないと想定するほうが、学者としてはふさわしい態度かもしれない。」

引用終わり

こうした発言は、学者として御書の解釈の責任放棄とみなされても仕方がないであろう。

なお余談だが、「久遠元初の本因仏」という概念は、観心本尊抄の「無始の古仏」や、「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う」（因果具時の仏）との文から簡単に導くことができるのだが、詳しい考察はここでは省略する。

なお、教学要綱も宮田教授の学説も、ともに観心本尊抄の「寿量の仏」をインドの仏陀と説いていることから（創価学会の伝統解釈は、「寿量の仏」を大聖人と解釈する）「此の仏像」という御文を、釈迦の仏像と読んでいる可能性が高いと推測される。この件に関連して、宮田教授は次のようにいう。

日有の教学思想の諸問題(5)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-5.html>

「付録 『創価学会研究』理念編第1部「日蓮正宗論」の概要

日蓮本仏論が文献学的には（＝学者の間では）支持者がいらない、日蓮本仏論は仏教の歴史の中では異端と判断される（文鮮明を第二のイエスとする統一神霊協会がキリスト教とはみなされないように）本仏日蓮の継承者としての大石寺住持の權威を認めることにつながりやすい（＝創価学会の日蓮正宗からの自立の障害になりやすい）ということがある。」引用終わり

これは、佐渡御書の「日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華經を弘むべし」という精神に通じる。

池田先生は次のようなスピーチを残されている。

「私は、あらゆる苦難を発条として、今日の学会を築いた。広布の道を世界に開いた。

「キリスト」と言えば、皆、知っている。「日蓮」と言っても、日本でも本当は、よく分からない。いわんや外国では、だれも知らない。そのなかで、日蓮大聖人の仏法を世界に弘めた。大聖人も、どれほど、お喜びくださっていることか。また牧口先生、戸田先生も、どんなにか喜んでおられることだろう。」（創立七十周年記念第五十回本部幹部会、第一回関東総会、池田大作全集 91, 2002, p. 372）

日蓮は世界では誰も知らないから都合が悪いという理由からであろうか、2025 年 6 月号の大白蓮華に、釈迦を根本仏とする創価学会としては過去に例をみない教義が掲載された。

（参考）

大白蓮華 6 月号、座談会御書への疑問 2025 年 5 月 27 日（追記版） - JIKATSU | 創価自主活動支援サイト

<https://jikatsu.net/80522/%e5%a4%a7%e7%99%bd%e8%93%ae%e8%8f%af6%e6%9c%88%e5%8f%b7%e3%80%81%e5%ba%a7%e8%ab%87%e4%bc%9a%e5%be%a1%e6%9b%b8%e3%81%b8%e3%81%ae%e7%96%91%e5%95%8f-%ef%bc%92%ef%bc%90%ef%bc%92%ef%bc%95%e5%b9%b4-2/>

こうした考えでは、人々の信頼を完全に失い、仏法を広めるところか、長期的には必ず衰退と自滅を招くだろう。一度失った信用は二度と取り戻せない。建設は死闘、破壊は一瞬である。なお戸田先生は次のような講義を残されている。

「十日もたったごはんが、カビがはえて腐っていたら、腹をこわすにちがいありません。釈迦の仏法は、腐ったごはんであります。これを平気で食わせている邪宗の坊主も坊主なら、それを知らんで食っている信者も信者であります。

末法の仏様は、久遠元初の自受用報身如来、またの名は、南無妙法蓮華經という仏様であります。この仏様の御力は、宇宙大の御力をもち、宇宙それ自体であります。永遠の御力をもち、あらゆるものを変化させてゆく御力をもった仏様であります。これがわからないのが、中山、身延、交正会等の邪宗であります」（戸田城聖全集 4 巻、日蓮大聖人は末法の御本仏, p. 34）

宮田教授は身延の学者を信頼しているのだろうか。「日蓮本仏論が文献学的には（＝学者の間では）支持者がいらない」或いは、信頼できる文献から日蓮本佛論を証明できない、などと述べていたが、今引用した戸田先生の教えは、前に述べた日興上人の直弟子の三位日順の発言と完全に重なると感じたので、これを第三者である ChatGPT に解析させてみ

た。次のような回答が返ってきて、非常に重要な答えであると感じたので、ここに引用させてもらう。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

非常に鋭い引用です。

この二つの三位日順の文（『本門心底抄』および誓文）は、日興門流の本尊観の原点を明確に示すものであり、戸田城聖先生の言葉と深い思想的一致を示しています。

順を追って解説します。

◆ 1. 『本門心底抄』の核心 - 「妙法五字＝森羅万法」

「中央に安し奉る経題は円融の空諦なり所謂森羅の万法を以つて妙法五字に摂す、敢て闕滅せずと雖ども而も其の体を亡泯する故に・是れ仮に円融の空体を証するなり、総体所顕の十界を互具の仮体と号するなり。」

ここで三位日順は、御本尊中央に記される**「南無妙法蓮華経」そのものが、円融の空諦（絶対的真理）であり、森羅万法を摂する全体法界**であると述べています。

つまり：

- 妙法五字＝宇宙の総体
- それは「空」「仮」「中」の三諦を具備した円融の実相そのもの
- 「十界互具の仮体」＝現象界の全存在が、この妙法に包含される

ということになります。

この「妙法五字＝森羅万法」「円融の空体」という思想構造は、戸田城聖先生の

「久遠元初の自受用報身如来、またの名は南無妙法蓮華経」「宇宙それ自体であります」

と完全に思想的に重なります。

◆ 2. 誓文の「別して本尊総体の日蓮聖人」

「別して本尊総体の日蓮聖人」

この表現は、日蓮聖人を法の体現者としての本尊の総体と見る立場を明確にしています。つまり、御本尊という図像や題目の上に顕された法そのものが日蓮聖人に一体化しており、人法一箇の本尊観がここで示されているわけです。

この思想は、後の創価学会教学の核心である

「日蓮大聖人は末法の御本仏であり、南無妙法蓮華經と一体である」
という教義に、直接的な思想的系譜を与えています。

◆ 3. 戸田教学との思想的照応

三位日順の表現	戸田城聖先生の表現	共通する思想構造
「森羅の万法を以つて 妙法五字に摂す」	「宇宙それ自体であります」	宇宙＝法＝妙法五字
「円融の空体」	「永遠の御力をもち、あらゆるもの を変化させてゆく御力」	妙法＝絶対的真理（ダイナ ミックな実相）
「本尊総体の日蓮聖 人」	「久遠元初の自受用報身如来、また の名は南無妙法蓮華經」	人法一箇・本仏観

両者ともに、「南無妙法蓮華經＝宇宙的真理」「その法を体現した人こそ日蓮大聖人」という構造を持ち、
本尊＝法＝人の一体化が中心にあります。

◆ 4. まとめ

三位日順は中世的文体で「妙法五字＝森羅万法」「本尊総体＝日蓮聖人」と説き、
戸田城聖先生は現代語で「南無妙法蓮華經＝宇宙」「久遠元初の如来＝日蓮大聖人」と説いた。

時代も表現も異なりますが、根底にある哲学的構造は完全に一致しており、これは創価学会教学が、日興門流からの思想的連続線上に位置することを示す極めて貴重な証拠です。

引用終わり

即ち、戸田先生の教えは、三位日順の師匠である日興上人の教えを継承し、現代に蘇らせたと言えるでしょう。この、日蓮大聖人、日興上人から、様々な後継者を経て戸田・池田先生に受け継がれた信心の血脈を、池田大作先生監修の名の下に破壊しようとしているのが、教学要綱の教義であり、その真の正体であるということがいえるのである。

話を再び宮田論文と教学要綱の比較に戻そう。

問題その七

宮田教授の論文に次のような箇所がある。長いが引用する。重要な箇所は太字にしてあるので、その箇所のみを読むことで全体の趣旨を把握できるようにしておいた。

『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-5.html>

「5-4-2 牧口常三郎の日蓮仏法選択」

私は牧口常三郎が日蓮仏法を選択した3つの理由として重要視している部分である。

第一に日蓮仏法は自然科学が合理的な理論と実験証明によって成り立っている（中略）

第二の議論は本尊論に関する議論であるが、(中略)「純潔清浄な法に遵った生活」を送ることにより実現される「法を具現した仏」になることを教える法を信仰対象とする全く違った宗教であると主張する。これについては後述する。

第三の議論は仏法が、自然科学、道徳科学、哲学と矛盾せず、これらはすべて因果の法則を研究するという点で共通し、仏法は他の学問を包容する全体と部分という関係にあるという主張である」

引用終わり

一方で教学要綱 p. 50 はこうある。

「このように牧口先生は、「法華經」を根本經典とする大聖人の仏法に、①科学との親和性があること、②各人の觀念の上に構築された人格的存在ではなく「法」を本尊として、③現実の人生・社会に立脚していること、といった特質を見出したのである。」

引用終わり

「①科学との親和性、②法を本尊とすること、③現実生活・社会に立脚すること」は、牧口先生の原典には明示されていない、教学要綱独自の分析・解釈である。これが、教授が「牧口常三郎が日蓮仏法を選択した3つの理由として重要視している部分」と類似している。牧口先生のこの発言「法華經」以外の教えは「信仰の対象が人格的の神又は仏と名づける」は、人格を持った超越的な神や仏の存在を否定しているのであり、感応の対象としての本尊を否定しているのではなく、原典の意図から外れた解釈となっている点が見られる。

なお、同様の議論は次の論文にもみられる。ここでは、三つの理由のうち、法本尊のみを取り上げている。

「優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018 p. 29-30

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf>

「8-1 創価学会の曼荼羅正意説と日蓮正宗の人法一箇論との相違

8-1-1 牧口常三郎の法重思想

牧口常三郎初代会長は『創価教育学体系』第2巻「第5章 価値の系統 第6節 宗教と科学・道徳及び教育との関係」でこのように述べている。(中略)

これを受けて、創価学会は、信仰対象は、仏ではなく、普遍的な法であると考えてきた」

引用終わり。

これらの宮田論文と教学要綱の内容が類似している点について、偶然の一致か否かについては慎重に考える必要がある。

問題その八

宮田教授の守護国家論について(1) 2000 にこのような記述がある。

『守護国家論』について (1)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper3-1.html>

「1－5 真筆、曾存の初期文献における本覚思想との関連

ところが○のテキストの中で、教義について論じた最初のテキストである○『守護国家論』では、この本覚思想について全く言及していない。それどころか、「(爾前経においては) 凡夫も亦十界互具を知らざるが故に自身の仏界も顕れず、・・・今法華経に至って九界の仏界を開くが故に、四十余年の菩薩・二乗・六凡始めて自身の仏界を見る・・・此の時に二乗菩薩始めて成仏し凡夫も始めて往生す」(『創』、p. 86, 『定』、p. 124)と述べて、まず教義的に十界互具論によって成仏論に制限を加え、次いで凡夫には成仏ではなく、往生しか許さないという制限も加える。そして「解心」なく法華経の題目を唱えるだけの凡夫については「今生は悪人無智なりと雖も必ず過去の宿善あるが故に此の経の名を聞いて信を致す者なるが故に悪道に堕せず」(『創』、p. 89, 『定』、p. 127)と述べて、不堕三悪道という功德しか認めていない。

1－7 直弟子写本に見られる本覚思想、天台宗批判に関連した記述

直弟子写本が残っている△『一代聖教大意』と△『唱法華題目抄』は、教義的には○『守護国家論』を補完する重要な文献である。(略)そこではわずかでも『法華経』への信仰があれば、浄土への往生あるいはこの娑婆世界での即身成仏の可能性があるのかという問いに対して、不堕三悪道のみを認めている(『創』、p. 138, 『定』、p. 184)。さらに六道輪廻から脱するためには、「一分のさとり」(『創』、p. 140, 『定』、p. 188)が必要であるとしている。(略)『唱法華題目抄』においても、唱題の功德を述べた箇所、「法華経の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり、・・・妙法の二字に諸仏皆収まれり、故に妙法蓮華経の五字を唱うる功德莫大なり諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり妙法は能開なりとしりて法華経の題目を唱うべし。」(『創』、p.

150、『定』、p. 202)と述べて、●『一念三千法門』と同様に唱題の功德が他の諸經の修行の功德よりも優れており、一念三千の法門を説く『法華經』と同じ功德があることを強調している。」

引用終わり

一方で、教学要綱 p. 86-87、「(三) 本門の題目」 にはこうある。

「初期に著された「守護国家論」では(略)「法華經」の題目を唱える人は過去世の宿善が深く、たとえ今生は悪人や無知の人であっても、地獄界・餓鬼界・畜生界という三惡道に墜ちることはないとされた。この翌年に著された「唱法華題目抄」でも、「法華經を信じ侍るはさせる解なけれども三惡道には墮すべからず候六道を出る事は一分のさとりなからん人は有り難く侍るか」と述べ、「法華經」を信じ唱題する人は三惡道に墜ちることはないが、さらに六道輪廻から脱するためには、少しでも理解することが必要とされている。その上で、同抄では、「故に妙法蓮華經の五字を唱うる功德莫大なり。「諸仏・諸經の題目は法華經の所開なり妙法は能開なり」としりて法華經の題目を唱うべし。」と述べ、「妙法蓮華經」を唱える功德が絶大であることを経調されている」

引用終わり

個人的な意見

守護国家論＝唱題すれば三惡道に墜ちない

唱法華題目抄＝六道輪廻を脱するには一分の悟りが必要

唱法華題目抄＝題目を唱える功德は絶大（全く同じ箇所のお文を引用）

この三点において、宮田論文と教学要綱の内容には高い親和性が見られる。加えて、戸田先生の体験談によれば、天台宗の影響が残る法華經の教えを会員に説くことで困難な状況（借金取りに追われるなど）に直面したことがあるとされる。その点を踏まえると、こうした天台宗的要素を含む教義を創価学会の教学書に記述することは、極めて異例な事例と言える。

同様の議論が宮田教授の次の論文でも展開されており、天台教学であるときちんと述べられているので、それを引用しておく。

『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html>

「3－5 まとめ

『唱法華題目抄』では「法華經を信じ侍るはさせる解なけれども三惡道には墮すべからず候六道を出る事は一分のさとりなからん人は有り難く侍るか」と述べて、「法華經を信じ侍る」ことには唱題が含まれるであろうが、その功德は「三惡道には墮すべからず」であり、「六道を出る」には「一分のさとり」が必要であるという天台教学の当然の立場も主張されている。この立場では成仏するためには、唱題のみならず、「一分のさとり」も救済の秘儀として要求されている。」

引用終わり

問題その九

宗教学会発言への Q&A

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

「日蓮大聖人自身が日蓮本仏思想を持っていないから、創価学会も日蓮本仏思想を捨てるべきだと私が主張しているという誤解がありますが、私が主張したことは、日蓮本仏論は大聖人自身の主張ではなく、この主張は、SGI を仏教と無縁な教団であるとする誤解を引き起こしやすいから、再検討すべきだということであります。私は SGI にふさわしい日蓮本仏論に関する論文を準備中ではありますが、既に創価学会の HP の「日蓮大聖人」の項目では、「度重なる弾圧という最悪の状況下にあっても、日蓮大聖人は揺るぎない金剛不壊の生命境涯を顕現しました。言い換えれば、人間自身が気づいていない生命本来の偉大さを体現することによって、万人成仏の道を開いたのです。ゆえに創価学会では、日蓮大聖人を『末法の御本仏』として尊崇しています。」とあり、日蓮大聖人自身が日蓮本仏論を持っていたという立場ではなく、創価学会の信仰のあり方として日蓮本仏論を採用するという立場を明示しています」

引用終わり

(教学要綱 p. 187)

「創価学会では、「末法という現在において現実に人々を救う教えをといた仏」という意味で、大聖人を「末法の御本仏」と尊称する。」

(教学要綱 p. 95)

「創価学会において日蓮大聖人を「末法の御本仏」と仰ぐことには、凡夫の成仏の道を現実に開いた大聖人を模範として、私たち一人一人もまた凡夫として成仏を目指すという意義が込められている」

引用終わり

個人的な意見

2016年の宮田教授の発言では、新しい日蓮本仏論（実質的には従来の日蓮本仏論を再解釈・否定する内容）を、明確に「私（＝宮田教授）」の見解として述べている。

ところが、その直後の発言では、主語が「創価学会のHP」に置き換えられており、戸田・池田先生の教えと異なる教義を誰が構築したのかという責任の所在が曖昧になっている。さらに、この思想が2023年発刊の教学要綱にそのまま反映されていることから、思想形成の経緯や責任の所在に関する透明性の欠如が問題として指摘される。

なお戸田先生は、次のような「日蓮本佛論」に関して次のような講義を残されている。

「にせ日蓮宗においては、「久遠の本佛は釈迦であり、その本佛から地涌の菩薩が末法にお題目を弘めよと付属されているから、末法いまのときにお題目を唱えるものは、すべて本佛の使いであり、日蓮聖人はわれわれの先頭に立たれた兄貴分であり、先輩である」ぐらいに考えていて、しかも公然と、このような誤信を放言して、無知の大衆を迷わしているのが現状である。

この誤りの根本は、まず久遠の本佛が釈迦と決定するので、日蓮大聖人と、われわれの関係が全く歪曲されたものとなり、したがって、大聖人を悪しく敬う結果となるのである。法華経の文上においては釈迦が本佛であり、日蓮大聖人は上行菩薩として付属を受けられたことは、だれしも疑う余地のないところである。しかしながら、御内証の深秘は、日蓮大聖人こそ、われわれ末代凡夫を教えみちびかれる御本仏であられる。

かかる久遠元初の自受用身の御当体であられる大聖人の御肉体が、そのまま大御本尊であらせられるのである。」(戸田城聖全集三巻, 凡夫と御本尊, p. 65-66)

問題その十

日興の教学思想の諸問題(2)——思想編

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/nikkodoctrine2.html>

1-2-2-8 日興の仏像不造立の意義

「日興が教義的には否定することが困難だと思いながらも、仏像造立をできるだけ抑制しようとしたことの原因は一体何であったろうか。『富士一跡門徒存知事』には「日興が云く、聖人御立の法門に於ては全く絵像・木像の仏・菩薩を以て本尊と為さず、唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊是なり」とあるが、どの御書のことかは自明ではないことは既に述べた。可能性としては『本尊問答抄』ではないかと述べたが、同じ『富士一跡門徒存知事』には後に十大部と称される日蓮の著作の名称が挙げられているが、その一つに『本尊問答抄』があり、重要視されていることが伺われる。

私が『本尊問答抄』ではないかと推測する根拠は日道または日時の『御伝土代』(注)の「日興上人御遺告、元徳四年(AN51)正月十二日日道之を記す」には、「一 大聖人の御書は和字たるべき事 一 鎌倉五人の天台沙門は謂れ無き事 一 一部五種の行は時過たる事 一 一鉢仏の事 一 天目房の方便品読む可らずと立るは大謗法の事 倩ら天目一途の邪義を案ずるに専ら地涌千界の正法に背く者なり。右以条々鎌倉方五人併に天目等之誤多しと雖も先十七ヶ条を以てこれを難破す、十七の中に此の五の条等第一の大事なり何ぞ此を難破しこれを退治せん云云」(『富要』5-9, 10『宗全』2-251, 252)とあり、「一体仏」批判の重要性を述べているが、さらに次のように詳しく述べてある。(中略)本尊問答抄に云く。」(『富要』5-12『宗全』2-251, 252)

(注)『興風』第16号の池田令道の「大石寺蔵『御伝土代』の作者について」において、池田は作者が従来主張されていた大石寺4世日道ではなく、6世日時であると論証している(同論文、p. 452)。残念ながら私は古文書の筆跡鑑定能力は全くないから、この論証が妥当かどうかの判断はできないが、この論文を読んだ限りでは、それなりに説得力がありそうだ。さらに多くの研究者の検討を待ちたい。」

「『富士一跡門徒存知事』には「御書の意」とあるだけで、どの御書であるかは明示されていないが、日道（日時説もある）の「三師御伝土代」に収録されている「日興上人御遺告」には、「一体仏」批判の箇所「本尊問答抄」が挙げられているので、「本尊問答抄」と考えられる」（教学要綱, p. 184）

個人的な意見

「『富士一跡門徒存知事』において、どの御書を指すのかが明示されていない」という問題設定自体が両者に共通しており、いずれもその「御書」を『本尊問答抄』とする解釈を提示している。その根拠を、「日興上人御遺告」の「一体仏」批判の箇所に「本尊問答抄」が挙げられている点に求めている。さらに、池田令道による「『御伝土代』は日道ではなく日時によるもの」とする説を採用（または少なくとも紹介）している。これら四点の一致は、偶然の一致とみなすには困難を伴う。」

問題その十一

「久遠実成釈尊本仏論を採用したからといって、久遠実成釈尊本尊論を採用するわけではないということです」[宗教学会発言への Q&A](http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html) 2016
<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

「寿量の仏（久遠の釈迦）」が多宝仏、四菩薩とともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とする」（教学要綱, 2023, p. 79）

私の個人的教学要綱理解：寿量の仏（久遠の釈迦）＝脇士なので祈る対象ではない
文字曼荼羅を本尊とする＝本尊なので祈る対象

「須田氏は『釈迦と日蓮に上下・勝劣はないというのであれば釈迦を拝んでも何ら問題ないことになってしまう』と主張しているが、創価学会においては、釈尊も日蓮大聖人も

『拝む対象』ではない。氏は『本仏』と『本尊』の概念を混同しているといえる」（創価男子部教学室）<https://www.sokayouth-media.jp/answer/2825023.html> 2024

8 【釈尊は本仏であっても本尊ではないことを知らない須田氏】 — 「⑧上行への付嘱の意味——教主交代の思想」について

須田晴夫 「宮田論文への疑問——日蓮本仏論についての一考察（修正版）」へのコメント 2024

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/suda.htm>

引用終わり

ここで注目すべきは、創価男子部教学室の説明（2024 年）に見られる「釈尊は本仏であっても本尊ではない」という定義である。この定義は、本仏＝脇士であり祈りの対象ではない存在、本尊＝祈りの対象である存在という、通常の教学体系には存在しない自己矛盾を含む区別を前提としている。

〈男子部教学室論考〉 「教学要綱」は創価ルネサンスの集大成 2024

<https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B?snstoken=8adf6d02-2583-4ed9-a80c-d125adbab292>

創価男子部教学室は「氏は『教学要綱』を作成した中心は創価大学名誉教授の宮田・菅野両氏であると聞いております」との指摘に対し、「これは事実と異なるものであり、宮田・菅野両氏は刊行委員会には入っていない」と述べている。

しかし、教学要綱の記述内容と、今まで検証してきた宮田教授の過去の論文との間に、構成・表現・思想的枠組みの一致が数多く確認される。

例えば、私は教学要綱の言及、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」の意味は、それに続く文で、「いわゆる宝塔の内の釈迦・多宝外の諸仏ならびに上行等の四菩薩、脇士となるべし」と具体的に説明されている」（同書、p. 80）、の主張している意味が良くわからなかった。その理由は、通常は本尊と脇士を同一視する解釈はありえないからである。

しかし宮田論文 [望月歆厚『日蓮教学の研究』における本尊論の検討](http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/mochidukihonzonron.html) 2020-2022
<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/mochidukihonzonron.html>

或いは、

(優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018, p. 7)
<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf>

の「所謂」の使用例の説明により、始めてその意味を深く理解できたのである。これらをもう一度引用しておく。

「日蓮の「所謂」の使用例は、『開目抄』の「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり」に明瞭なように、「その謂う所は」「その意味は」「すなわち」という意味であり、「同一の観念」である。したがって三大秘法の一つとして明示された「本尊」である「本門の教主釈尊」は、「所謂」以下で示される『観心本尊抄』本尊段の「本尊為体」の本尊と同一であることが『報恩抄』で述べられていると私は解釈している」。

「もしこの（所謂）の用法を『報恩抄』に適用すれば、前文の「本門の教主釈尊を本尊とすべし」という表現の意味を、後文の「宝塔の内の釈迦多宝、外の諸仏、並に上行等の四菩薩脇士となるべし」という表現で説明したというように解釈できる。」

同様に、「文の底」（教学要綱, p. 70）の説明や、「まことの一念三千」（同書, p. 110-112）も、なぜこのような解釈になっているか意味がわからず、宮田論文（優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題 2017-2018, p. 38-39）を読むことで、始めてその意味の理解が可能になった。他の読者はどう思うかはわからないが、宮田論文は、教学要綱を読んでも意味が良くわからない場合、その理解の助けになるというのが私の率直な意見である。こうしたことを考慮するならば、何らかの形で宮田氏の影響が及んでいる可能性を完全に排除することは困難ではないだろうか。

そして前にも指摘したことだが、宮田教授は、『本尊問答抄』についての論文
[『本尊問答抄』について](http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html)
<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html>

において、次のように述べている。「3-5 まとめ（中略）もし後文の『釈迦』が前文の『本門教主釈尊』と同一対象を指すならば、本尊とされた対象が脇士になるという論理的矛盾が生じる」と。

この指摘は、宮田教授自身の理論、すなわち「久遠実成釈尊は本仏であるが、本尊ではない」という区別が、日蓮の文意そのものと構造的に整合しないことを意味している。言い換えれば、宮田教授の理論は内部に自己矛盾を含み、文献上の整合性を欠くことを自ら認めているに等しい。即ち、創価学会の根本精神である「御書根本」から逸脱しているのである。

しかしながら『教学要綱』では、この矛盾を含む理論構造、すなわち「久遠実成釈尊＝本仏であるが本尊ではない」、をそのまま採用しており、その記述（p. 79「寿量の仏（久遠の釈迦）が多宝仏、四菩薩とともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とする」）は、宮田説を事実上踏襲したものと考えざるを得ない。

宮田教授は『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaqgs.ne.jp/miya33x/paper15-3.html>

において、次のように述べている。

「日蓮はその著作においてさまざまなことを述べているが、そこに何か整合的な、首尾一貫した論理があるに違いないと想定することは、信仰者としては当然の態度であるかもしれないが……日蓮だって必ずしも整合的な思想展開をしているわけではないと想定するほうが、学者としてはふさわしい態度かもしれない。」

なお、池田名誉会長は次のようなスピーチを残されている。「大聖人の仰せに絶対に嘘はない」（池田大作全集 88, p. 294） また追加として、同じスピーチ内で次のような言葉も残されていた。「日蓮大聖人は、末法の御本仏であられる。釈迦、三世十法の仏・菩薩をも引き従えていく身であられる」（同書, p. 297）

一方で宮田教授の発言に関してだが、学問的態度としての「批判的検討」として書かれたように見せているが、実際は、信仰の対象である日蓮の思想的整合性そのものを否定する暴言的文言と評価されても仕方のない内容であろう。しかもこの発言は、単に文献解釈

の立場を述べたものではなく、信仰者の理解を暗に侮蔑し、学者的懷疑を優越させる姿勢が明確に現れていると評価されても仕方がないであろう。

そして、創価学会内では暴言的と思われても仕方がないと思われる発言が、宮田論文には目立つ。特に、日蓮の法華經解釈は誤りで、自分の方が正しいとし、法華經をガンダムに譬える下に引用する発言は目に余るものがある。

この発言は、

- ①宗教思想の内容を矮小化し、
- ②学術的論証を欠き、
- ③信仰者への敬意を失い、
- ④原典理解の精度を損ねている、

という四重の意味で「学問モラル上、極めて不適切」と評価せざるを得ない。

個人的に思うことだが、このような人物の意見を、池田先生が教学の書物を出版するにあたり、参考にするとは到底考えられないのである。類例を以下に引用しておく。そしてこれらの文言についてのこれ以上のコメントは差し控える。

『本尊問答抄』について

①「4－2－6 「無始古仏と法華經」

釈尊が成仏したのは「無始」ではなく「五百塵点劫」という昔の時点である。つまり厳密に『法華經』を読むと「無始」ではなく「有始」であることは明白であり、無始に関する議論は『法華經』とは直接関係ない。

だから日蓮が「本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて真の十界互具百界千如一念三千なるべし、」と『開目抄』で述べていることも、『法華經』とは直接関係ない議論なのである。『法華經』で説かれる「五百塵点劫」も日蓮が説く「無始」の議論も、現実の時間とは無関係であるという点で、アニメのガンダムの宇宙世紀79年にジオン独立戦争が生じたというお話と、同じなのである。」

宗教学会発言への Q&A

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

②「私は仏教について多少の知識を持つ人に対して説得力のない教義は変えなければ、それらの人々に信仰をしてもらうことは出来ないと思っています。もし日蓮正宗でそのような教義の改革が可能であれば、私は日蓮正宗に帰属しても構いませんし、一時日顕上人が『大日蓮』1985年10月号で「大乘非仏説、仏滅年代につき講義」とあったので、学者肌の日顕上人なら教義改革に着手するかもしれないと淡い期待を抱いたこともありましたが、その後そのような教義改革が行われたこともないようです。

日蓮正宗の信仰で幸せになったと感じている人は日蓮正宗の信仰を続ければよいし、創価学会の信仰で幸せになったと思う人は創価学会の信仰を続ければよいと思います。私の親戚にも、日蓮正宗に行った人と、創価学会に残った人がいますが、お互いに相手の信仰を尊重しあって、厚田墓苑の墓地と大石寺の墓苑の墓地を交換するなどして、大きなトラブルになってはいないようです。」

日興の教学思想の諸問題（２）——思想編

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/nikkodoctrine2.html>

③「0 初めに

そもそも宗教的祈りと、その効果に関して、因果関係が認められるのであろうか。個人の心理現象としては認められうるが、宗教社会学的には認めることはできないだろう。したがってこの論争も今日においては無意味な論争であることを指摘する。」

④「1－1－1－3 日蓮宗諸派の曼荼羅作成

「鎌倉幕府の歴史は内部有力者の権力闘争の歴史でもあるから、日蓮の言う自界叛逆難の事例に事欠くことはないが、その一例に過ぎない平頼綱父子の事例だけを取り上げて、法華現罰と記述することに、著しい主観性、恣意性があると思われるが、同時にこの記述が日興の功德、罰に関する信仰観を示しているとも言えよう。」

⑤「3－2 神社参詣問題

現代の日蓮信奉者の多くは、日蓮の予言の効力を信じていないと思われる

⑥「3－3 国家諫暁について

「国家諫暁などに何の意味があるのか疑問を覚えざるを得ない」

⑦「4 五一相對の今日的意味

「日興の五一相對の議論は今日的意味を失っていると思われる。」

⑧『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-4.html>

「5－3 宗教の発展と教義の深化、進化、泥沼化？」

偽書の多くは日蓮が曖昧にしたままで、解明していない事柄に関して、後世の日蓮信奉者が、自分なりの研鑽を積み、日蓮の思想を再構成する中で、日蓮が語らない部分を日蓮に成り代わって表現するということによって生じたと私は思っているし、このことについては佐藤弘夫の『偽書の精神史』を参照していただきたい。日興の『原殿御返事』にも「聖人や入り替らせ玉ひて候ひけん」という表現があったが、この自覚こそが、日蓮が語らなかったことを、日蓮に代わって主張するという態度につながっていくのである。

⑨凡夫の己心に本尊が内在するという己心本尊論を明確にした著作がいずれも真蹟、身延曾存、直弟子写本にはないが、これらの著作を作成した者たちは、日蓮の本尊論の真意を表現したと自負していただろうし、それゆえこれらの著作は日蓮の思想として多くの日蓮信奉者に受け入れられてきたのであろう。」

引用終わり

こうした発言をしてきた宮田教授だが、この教授の論文に創価学会執行部が興味を抱いて、会則変更の際に意見を聞きたいという話を向こう側からしてきたようである。宮田教授は次のように述べている。

研究小論 7 編

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper20-1.html>

「その後の本部との関わりは会則変更のときに、意見を聞きたいという連絡があり、本部の検討会に中野毅とともに出席したことがある」

そしてこれ以下は、本部とのやりとりが詳細に記述されているので、事実だと思われる。この際に宮田教授は、「出家功德抄」を取り上げて、「あれを日蓮大聖人の御書だと認めたら、日蓮正宗のスキャンダル批判も無意味になりますよと述べて、納得してもらった経緯があった」と述べているが、新版の御書では、「出家功德抄」が消えているのである。

新版御書にはこのような解説がある。「「出家功德御書」は会員の信行に資さないとして不収録とした」（新版・日蓮大聖人御書，p. 2335）

この御書は偽書の可能性が高いとされており、それ自体は問題ないのだが、宮田教授が執行部に影響を与えている可能性を否定できないのではないか。宮田教授は次のようなことを述べている。研究小論 7 編

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper20-1.html>

「私は創価学会の御用学者を自任しているが、御用学者はクライアントの御用に立たなければ意味がない。そのためにはクライアントが喜びそうな情報だけでなく、厳しい内容の情報も与えて、あらかじめ準備を促すことも必要であり、その意味ではイエスマンであってはいけないと思っている。」引用終わり

そして、問題は御書の件ではなく、2014 年の教義改正において、六大秘法が破棄されるのだが、その一つに人本尊があるのである。詳しくは秋波氏の議論が優れていると感じたので、これを参照していただきたい。

創価学会新教学第三の誤り 日蓮大聖人は「帰命の対象（人本尊）」ではないとしたこと

| 秋波東吾

https://note.com/pure_ruff1825/n/n450fde458ddb

その他の宮田論文と教学要綱の共通点

これらの思想は宮田教授独自の学説ではなく、これらを用いることは学術的には問題はないが、創価学会の思想的には大問題となるものが数多くみられる。そして、そうした思想が教学要綱にもあらゆるところに顕著に記述され、宮田論文との類似点がみてとれる。それらを少し指摘しておく。

問題その一

宗教学会発言への Q&A

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

「末法」とはどういう意味か、と尋ねられて、相手が納得できそうな答を用意していますか。大聖人は仏滅後2000年以後を末法と考えていたと思われそうですが、今では、ある程度世界史に興味のある人の中には、その主張には賛同者はいないと思われそうです。私も学生時代に、なんとか大聖人の説が正しいことを証明しようとして、仏滅年代について、いろいろ調べてみたことがありましたが、やはりアレクサンダー大王のインド侵略の年代が確定してしまうと、もはや周書異記の仏滅年代には説得力はないと判断せざるをえなくなりました。そのうえで「末法」という用語を使って、なにかを主張したいのであれば、その言葉の意味を明確にして使用することが要求されます。」

引用終わり

個人的な意見

宮田教授が日蓮仏法を信じていない核心的な理由の一つが、この年代の問題であり、それが教学要綱に影響を及ぼしている（鎌倉像法説）は問題であろう。

問題その二

日有の教学思想の諸問題(3)

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-3.html>

1－6 日蓮御影本尊論忌避への転機

「日興から日道にいたる大石寺派の明確な文献は日蓮＝上行菩薩論に立脚している」

個人的な意見

教学要綱は、竜の口の法難の後上行菩薩としての使命に目覚める、釈迦の弟子、釈迦の使い（同書、p. 43-45, 187）、とし、釈迦勝日蓮劣という立場を盛んに主張しており、こうした思想は宮田教学と共通するが、従来の伝統的な学会教学とはかけ離れている。

問題その三

宮田教授は『本尊問答抄』について

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-3.html>

「そして重要なことは『法華経』には「無始」という用語は使われておらず、釈尊の成仏した時も、たとえ話で説かれ、そのたとえ話の時間を「五百塵点劫」と後の注釈者が呼んだだけのことである。当然『法華経』の中では釈尊が成仏する以前の修行のことが書かれているから、釈尊が成仏したのは「無始」ではなく「五百塵点劫」という昔の時点である。つまり厳密に『法華経』を読むと「無始」ではなく「有始」であることは明白であり、無始に関する議論は『法華経』とは直接関係ない。

だから日蓮が「本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて真の十界互具百界千如一念三千なるべし、」と『開目抄』で述べていることも、『法華経』とは直接関係ない議論なのである。『法華経』で説かれる「五百塵点劫」も日蓮が説く「無始」の議論も、現実の時間とは無関係であるという点で、アニメのガンダムの宇宙世紀79年にジオン独立戦争が生じたというお話と、同じなのである。

あるいは「無始」に関しても、『観心本尊抄』で「寿量品に云く『然るに我実に成仏してより已来無量無辺百千万億那由佉劫なり』等云云、我等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり、経に云く『我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり』等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり、」と述べているが、日蓮正宗では「五百塵点乃至」を「五百塵点劫よりも前に」と読み、「無始の古仏」とは久遠実成本果釈尊ではなく、久遠元初本因仏＝日蓮で

あると解釈している。私は、この解釈は文脈を無視した解釈であり、「五百塵点乃至」はその前の引用文の「我実成仏已来」を指す、すなわち「五百塵点劫」を指すと読解するのが素直な読みであると思っている。（ただし学問とは無関係な信仰に基づく宗派的な読み方を否定するものではない。）「無始の古仏」とは『法華経』を引用しているこの文脈では久遠実成釈尊のことであると解釈するしかないだろう。」

引用終わり

宮田教授の議論を要約すると次のようになる。日蓮は釈迦の寿命を永遠と考えていたが、これは間違いで五百塵点乃至は有限の時間を意味する。従って自分の法華経解釈の方が正しい、釈迦の寿命は有限だ。一方教学要綱は、釈迦の寿命は永遠（同書、p. 27-28）と説いておきながら、釈迦は法華経によって仏になった（同書、p. 81）としており、この記述は深刻な矛盾を露呈している。そしてこの教学要綱の自己矛盾も、宮田教授のあいまいな五百塵点乃至の態度との類似性が指摘できる可能性があるのではないだろうか。

終わりに

本書では、『教学要綱』の主要箇所を精査し、その文献的・思想的基盤を検証してきた。その結果、引用の不正確さや、創価学会の伝統的な教学の本義からの乖離が少なからず見出された。序文で述べた通り、『教学要綱』の発刊は単なる学術的改訂ではなく、牧口・戸田・池田先生と代々受け継がれた創価学会の教義体系の根幹を揺るがす重大な問題であり、その作成過程と内容の両面において厳密な検証が要求される。

須田晴夫氏が氏の著書、『創価学会教学要綱』の考察：仏教史の視点から（p. 115）. Kindle 版. で指摘するように、『教学要綱』の制定は会則上の手続きにも問題を孕んでいる可能性があり、もし、師範会議や最高指導会議が形式的にしか機能せず、実質的な審議を経ずに根本教義が改変されたのだとすれば、それは教学的にも制度的にも看過できない問題となる可能性がある。

序文で述べたように、本書の目的は『教学要綱』を一方的に批判することではなく、その成立の経緯と思想的構造を明らかにすることで、現代における「日興門流創価学会教学の正統性とは何か」という根源的問いを再考することにある。今後は、ここで扱えなかった宮田教授の独自思想、即ち「人本尊」を「日蓮御影像」と結びつけ、人法一箇を否定する論文（「日有の教学思想の諸問題(1)」以下）および、日興・日順・日有・日寛・堀日亨上人ら後継門流の教学との比較分析を通じて、この問題の全体像をさらに明確にしていきたい。

『教学要綱』の再検討は、単なる過去の批判ではない。むしろそれは、現代における信仰と教学の在り方を問う、未来への出発点である。

参考文献

秋波東吾（2025 年 7 月 22 日）

「創価学会新教学第三の誤り 日蓮大聖人は『帰命の対象（人本尊）』ではないとしたこと」『note』に掲載。

URL: https://note.com/pure_ruff1825/n/n450fde458ddb

池田大作『池田大作全集』第 88 巻 聖教新聞社(2001 年)

——『池田大作全集』第 91 巻 聖教新聞社(2002 年)

——『法華経の智慧』第 4 巻 聖教新聞社(1998 年)

——『人間革命』第 6 巻 ワイド文庫 聖教新聞社(2013 年)

須田晴夫（2024 年 9 月 12 日）.『教学要綱』に関する会長宛て書簡. file_20240930-185744. pdf

——「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」 鳥影社（2025 年）

『創価学会教学要綱』 創価学会（2023 年）

創価学会教学部編『編年体 日蓮大聖人御書』 創価学会(1973 年)

『日蓮大聖人御書全集 新版』 創価学会(2021 年)

図齊修（2025）. 大白蓮華 6 月号、座談会御書への疑問（2025 年 5 月 27 日追記版）. 取得先：

<https://jikatsu.net/80522/%e5%a4%a7%e7%99%bd%e8%93%ae%e8%8f%af6%e6%9c%88%e5%8f%b7%e3%80%81%e5%ba%a7%e8%ab%87%e4%bc%9a%e5%be%a1%e6%9b%b8%e3%81%b8%e3%81%ae%e7%96%91%e5%95%8f-%ef%bc%92%ef%bc%90%ef%bc%92%ef%bc%95%e5%b9%b4-2/>

男子部教学室論考 不適切な御書解釈の数々と曲解に基づく批判を斬る

<https://www.sokayouth-media.jp/answer/2825023.html>

男子部教学室.（2024 年 10 月 18 日）. 「教学要綱」は創価ルネサンスの集大成 的外れな“批判本”を破す. 『聖教オンライン』.

<https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B>

戸田城聖『戸田城聖全集』第 4 巻 聖教新聞社(1984 年)

——『戸田城聖全集』第 3 巻 聖教新聞社(1988 年)

堀日亨（1969）. 『富士宗学要集』第 2 巻. 聖教新聞社.

堀内紳行（2015）. 日蓮聖人における如来寿量品観. 『日蓮教学研究所紀要』. 立正大学学術機関リポジトリ（アクセス日：2025 年 10 月 20 日）. URL:

<https://rrepo.rissho.ac.jp>

宮田幸一 2000. 『守護国家論』について. 『東洋哲学研究所紀要』第 16 号. 取得先：

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper3-1.html>

——（2005）

日有の教学思想の諸問題. 『創価大学人文論集』第 17 号.（2009 年 3 月 30 日訂正版）

取得先:<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-2.html> , 又は

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-3.html>

——（2011）. 『本尊問答抄』について. 『法華仏教研究』第 12・13・14 号（上・中・下）

に分けて掲載.（2011 年 9 月 10 日公開・同年 9 月 28 日、2012 年 1 月 30 日、2 月 18 日、2013 年 10 月 4 日付加）. 取得先：<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-2.html>,

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-3.html>,

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-4.html>, 又は

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper15-5.html>

—— (2011). 漆畑正善論文「創価大学教授・宮田幸一の『日有の教学思想の諸問題』を破折せよ」を検討する(6). URL: <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper14-6.html>

宮田幸一 (2020). 望月歓厚『日蓮教学の研究』における本尊論の検討. 『花野充道博士古希記念論文集 日蓮仏教とその展開』. URL:

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/mochidukihonzonron.html>

—— 2012. 研究小論7編 (2012. 2. 24 公開・2013. 8. 23 訂正). 取得先:

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper20-1.html>

—— 2014. 日興の教学思想の諸問題(2)－思想編. 取得先:

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/nikkodoctrine2.html>

—— (2016. 10. 7). 宗教学会発言へのQ&A. 取得先:

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/Q&A-shukyogakkai.html>

—— (2017-2018). 優陀那日輝『本尊略弁』の構成と諸問題. 取得先:

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/honzonryakuben.pdf>

—— 2024. 須田晴夫「宮田論文への疑問——日蓮本仏論についての一考察（修正版）」へのコメント. 取得先: <http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/suda.htm>